

日蓮宗新聞

発行所 日蓮宗新聞社



菊岡 妙光

日蓮宗の寺院教会結社に毎月

月發送される機関紙、『宗報』

の表紙に今年度は書の内容が

掲載されている。作者は天才

書家として有名な金澤翔子さ

ん。数多くの神社仏閣での個

展、奉納、NHK大河ドラマ

『平清盛』のタイトル題字を手

がけ、紺綬褒章を受章してい

る。書道を習っている私にと

って彼女は雲の上の存在だ。

しかし、ダウン症の彼女と

母の泰子さんにとって、これ

までの道のりは壮絶なもので

あった。現在、30代の翔子さ

んは5歳の時から泰子さんに

師事し書を始めた。10歳で、

厳しい母の指導に毎晩涙を流しながらも般若心経272文字を書き上げた。この経験が今の翔子さんの土台となっている。

都内で揮毫のライブパフォーマンスが開催されるとの情報を得て、私は会場へと向かった。翔子さんは揮毫の前、目を閉じ、手を合わせ祈りを捧げた。小柄で華奢な体つきからは想像がつかないほど、迫力、躍動感がある力強い作品。

天才書家

揮毫の後、泰子さんは「障がいがある人も、自分でできることがある。障がいがあるてかわいそうだからと周りの人が手伝ってしまうことで逆に彼女たちは悲しんでいる。障がいのある人の力を信じて尊重してほしい」と語った。身体に障がいがあることが人間として何か特別なことではない。

生きとし生けるものすべての存在、行動をはじめ、私た

ちが私たちであること、すべては久遠のむかしに成仏された仏さまの悠久のいのちの中に包み込まれて生かされている。そのことに気づき、感謝し、その喜びと安らぎの中で、自身のいのちを最大限に生かしていくことが、大いなる仏さまのいのちを生きていることである。

自身のいのちを最大限に躍動させて生きる翔子さん。泰子さんにすると、知的障がい

があつて名譽心や競争心がなく、人を恨んだり、羨んだり、疑ったり、恐れたりすることがない分、喜びと安らぎの中で生きているという。だから素直な心が書にこもり、見る人に感動を与えてくれるのだ。

翔子さんの無垢で柔らかな合掌の姿は、大いなる仏さまのいのちの中で生かされていることへの感謝の姿であらう。(人権推進委員会委員)